

北 日 本 の 聚 落 (二)

西 龜 正 夫

屋 根 と 壁

屋根の材料は色々あるが何と云つても北日本で一番多いのは柿葺コケラであらう。これは已に富士の裾野から見え始めて宮城縣あたりから稍多く青森縣に入ると殊に目立つて多く、出羽方面にも亦少くない。北海道や樺太では新しい家は全部柿か又はトタンであると云つてもよからう。北海道でも稍古く開けた十勝平野には草ぶきが割合に多く、新しい北見には柿ぶきの方が多い様に思つた。

それと同時に壁に板かべの多いのも北日本の一特色をなして居る。これも大體柿ぶきの屋根と分布を等しくし、奥羽から北海道、樺太に多い様である。この柿の屋根と板壁とは火事の危険を極度に大ならしめるもので、函館や小樽が

度々大火にかゝつたことも成る程どうなづかれる。現に私の旅行中にも北海道の伊達紋別が大火の跡であつたし、秋田縣の船川に着くと昨夜大火であつたといふ話、そして土崎に行つて見ればこゝにも大火の跡の復興最中であるのを見た。(本項執筆中又々土崎大火の報をきいた)。寒い土地で火を澤山用ひるといふことや風も強いといふこともあらうが、家の材料が燃え易いものだといふことは大火の主原因であらう。

そこで小樽市あたりではしきりに耐火建築を奨勵し、町の大通りは特に市から多分の補助金まで與へて居る。そこで次第にコンクリートや煉瓦造の家が出来て、市街の景觀が一變しつゝあるのを見た。それで小樽や函館の大通りが特に目立つて美しい氣持がする。

併し一體から云ふと北海道や樺太の建築は粗末だ。朝鮮や臺灣とは全く正反對である。これは住民の氣持が根本的に違ふのであらう。臺灣や朝鮮では内地人は征服者の様な氣持になつて土着の住民よりも優越した威嚴を示さうと、凡ての建築を美しくする傾向があるのに、北海道や樺太ではそんな氣がなく、皆お互の同一民族であるから自分の郷里と同一程度のもので満足する。否郷土よりも一層低い程度でも満足する。ましてあまり永住しようと思ふ氣持が無い。兎も角も『かゝり合ひ』『腰掛け』式である。

小樽であつたかと思ふが借家には疊建具をつけないさうで、借り手が自辨しなければならぬさうして成るべく永住の氣持にならせるのだと云つて居た。尤も大阪あたりにもこの風はあるが。

少しく脱線したがトタン屋根は火事の豫防といふ點から起つたかと思ふ。これは南日本では物置小屋か何かに一時的に使用するが、都市に於て藁屋根を覆ふ位のものであるが、湘南地方

から次第に多くなる。尤も湘南のあたりは地質の關係上附近に瓦の産地の無いことも一理由であり、又大正十二年の大震火以來急にトタン屋根が増加したことは云ふ迄もない。茨城縣にもトタン屋根は少くなく、奥羽以北にも瓦が少くなくてトタンがそれに代つて居る。これは寒さの爲めに瓦は破れるといふ理由からであらう。廣島縣の一部や山陰地方に赤瓦の多いのも、普通の黒瓦では冬に破れるからだと云ふが、併し仙臺あたりに黒瓦のみで赤瓦はあまり見ないのはどう云ふものか。

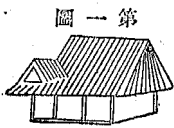
北海道以北で板壁の多いのは寒さを防ぐ上から云つてあまり有利とも見えぬ。藁屋根には土壁が多いから何も土壁の出来ないわけでもあるまい。材木が多いからだと言明し去るのもどうかと思ふ。樺太のイズバは無論材木が多いからであらうけれど、これは板壁とちがつて餘程防寒的である。

入母屋といふ屋根の形は屋根の中では最も進歩したものだと考へられる。如何にも上品で落付

きがあり、變化があつて美しい。これがどんな形から進化したかといふことは中々面白い研究問題だと思ふ。入母屋の原始形と思へる種々の型の屋根が方々に見える。併しそれは今暫く問題外として置いて、一體に入母屋は中部日本に多いことは争はれない。殊に藁葺の入母屋は廣島以東名古屋までの間に最も多く、大阪から岐阜までの間は殊に著しいが水戸附近には殆んど絶無、助川附近稀に存在し水澤附近に稍多いだけで、柿葺や瓦又はトタン屋根にあつては尙北海道の昆布^{コンブ}附近や和田あたりでも見られるが藁葺の入母屋はその邊には見當らぬ。九州にも殆んど無いと云つてよい。この入母屋はわが國で工夫せられたものらしいが、併しスマトラにも入母屋があるから確かなことは云はれない。

切妻は青森縣の三本木以北では柿葺に多く見られ、北海道でも柿葺の切妻は何處にもあまり見られないで、稀に物置とか土藏とかに見られる位のものである。然るに四阿はこれと反對で藁葺に最も多く、柿や瓦やトタンの屋根にもあ

ることはあるがそれも大抵は田舎に限られる様で、都會地には四阿が少いと云ふ感じがした。それは家が左右密接する場合四阿は兩落ちの余地を残さねばならぬから、自然に切妻の方が發達したわけなのだらうか。若しさうとすれば切妻よりも四阿の方が舊い型だと云ふことになるがどんなものか、アイヌの原始建築が四阿であることも考へねばならぬが、一方わが國の古い神社建築は切妻であり、南洋あたりには天地根原造に似た様なものもあるから新舊の區別でもない様である。



第一圖

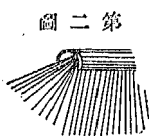
奥羽地方では一般に複雑な屋根が多く、種々のつものを出したり小屋根をつけたり第一圖の様に間取りには關係なしに屋根のみに入母屋型のつものを出したものなどがある。これは秋田縣の刈和野で見たのであるが、全く屋根の技巧と思はれた。

それから樺太に於て腰折れ屋根を見たのは珍しいことであつた。大都市は別として内地で

は殆ど見られぬこの形式が樺太にあることは、ロシア方面の影響であるのかも知れない。お寺でさへも太泊にある本願寺はトタン屋根のモスク式だ。

藁屋根の棟の巻き方は色々あるが、九州に多い藁のかつを木は比較的少くて四角な木の棒をかつを木にしたものが珍らしく目についた。これは青森縣の方に澤山ある。全く板で棟だけを覆つたものもあつて、南日本の竹を並べて押へたものどよい對稱をなして居る。全く材料の有無に關する問題だらう。瓦の箱棟も南日本よりは少く、その代りにトタンで棟を巻いたものがある。棟に土を置いたものも近畿以西ではあまり見られない。

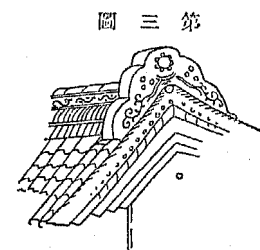
北海道の熱帯^{オホホ}で見た第二圖の様な棟の形は全くアイヌの家に似て居ると思つた。この形は棟の兩端に小さい煙出し穴を作つたものと酷似して居て、次第に入母屋型の藁屋根に漸



移して行く様である。

北日本の聚落

瓦屋根の棟の兩端に仰々しい裝飾を施したものは仙臺地方が最も著しく



(第三圖) 南は利根川の附近まで散見する。これはたしかに家の威嚴を示すものではあるが、あまりに重く、るしく見えてよい感じはしない。

構造と間取

寒い國では家を小さくし室を狭く區切る方が防寒的である。北海道あたりの家は大體この傾向がある。旅館などでも天井が低く室が狭く、隣室との間は悉く壁で仕切られて大廣間に代用は出来ぬ。室の入口も一間位で他は壁となり、窓は小さいものが一つあるきりで室内はほの暗い。窓下には爐が切つてあつて夏でもお客があればすぐに火を入れる。天井に紙を張るなどとも防寒のため北朝鮮あたりと共通の點がある。ところが奥羽地方、殊に出羽方面では民家が

一般に大きい。間口が七八間から十間以上もあるものがある。これは何故かと云ふと全く雪の關係で、冬は戸外の勞働が出来ぬから皆家の内で仕事をする。その仕事場としての土間を廣くするからだと聞いた。そう云へば土間は南日本では一般に狭く南へ行くに従つて益々狭くなる傾向がある。

曲り家は所々に散見する。國府津・我孫子・水澤・日詰・機織と各地で見た。中國に極めて少いこの式が九州と奥羽に多いといふことも一つの不思議である。これは一旦建てた家が家族の増加とか何とかで狭くなつた場合の一部増築と見るべき場合と、家畜小屋とか納屋とか仕事場とかの附屬的建築物を母屋に附加したと見るべき場合とがある様であるが、中國や四國地方では前者の場合には軒を繼ぎ足すことによつて目的を達し後者の場合には多く別棟として建てゝ居る様である。軒を繼ぎ足すとは即ち下をつけることで後にはそれが一つの形式と固まつて始めから所謂二重屋根に建築する様になり、下の部

は單に椽とするばかりでなくて坐敷に取り込んだものが四國にも九州の一部にもある(第四圖)

併しこんな形式は奥羽ではあまり見ない様だ。

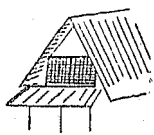
第四圖



中國に多い二重屋根は第四圖の様に單に裝飾的である場合もあり、又上部屋根と下部屋根との

の間を少し高くして小窓をつけ、屋根裏を二階として物置などに利用したものもある。これは二

第五圖



第五圖



階建の萌芽で云はゞ半二階とも云ふべきものであらう。然るに

この形式が北日本には少くて別の形式の半二階が見られる。例へば第五圖は常磐線の廣野附近や秋田縣の刈和野附近に多いもので切妻又は四阿の妻入の半二階、第六圖は東北線の日詰附近や青森縣の一部などに散見する平入の半二階である。

平入と妻入とは混淆して居てその分布が明瞭でない。概して云へば都市又は街村に妻入が多

第六圖



い様でもあるがそれが必ずしも間口を狭く奥行を長くせねばならぬといふ様な事情から考案せられたものとのみ速断も出来ないのは、

一戸あたりで家の兩側が充分餘地があつていくらでも間口を廣く出来る所にさへ妻入の多いのを見るといふ事實もあるからである。又妻入りが必ずしも出雲系統だとも云へないのはアイヌの家が多く妻入であることを見てもわかる。

妻入の家で切妻の屋根の妻を非常に長く前方に突き出したものが土崎や横手などに多い。ひ

第七圖



ごいのは一間以上多分七八尺位も出て居るらしい(第七圖)これは何のためであるかその地方の古老に尋ねて見たけれども要領を得なかつた。たゞ傳説となつて居るに過ぎないが、併しその起原は何等かの必要から來たものであらう。

概して北日本の家に曝し椽の少いのは寒さとか雪とかの關係であらうか。奥羽では多く外雨戸になつて居て、雨戸の上部に障子やガラスがはめてあるのは雪に閉ぢ込められた時の明り取りだと聞いた。北海道では雨戸(繰戸)は少くて大抵は小さい窓のみとなつて居る。これも寒さのためであらう。

田舎の小さい家にまでも一間四方位の出玄関のついて居るのは先づ樺太で目につき、東部北海道でも澤山見受け、更に出羽方面でも所々に見ることが出来た。三軒五軒の長屋になると三つ五つと一戸毎に玄関がつき出て居る。これは室の出入の度毎に寒い外氣が直接室内に侵入せぬ様にといふ工夫であらう。北歐に多い形式であり、北朝鮮あたりでも官衙公署にはこの式の建築が多いが併し民家にはあまり見ない。

アイヌの小屋は構造から見て南洋土人とは著しく違ふが寒さに對する防衛法としてはあまり巧妙であるとも見えぬ。暖房法としては爐が用ひられて居るが、この爐なるものは廣く南日本

にも擴がつて居たのを近年になつて次第に廢せられた様である。廣島縣の南部でも三十年前までは用ひられて居た。丹波あたりでも十年前まではあつたが今は殆ど無いといふ。これは薪炭の高價になつた關係もあらう。變化が進んで清潔を好む衛生思想の發達した關係もあらう。炬燵といふものは爐から進化したものかとも思ふが今その起原を調べて居ない。朝鮮の溫突の様

な巧妙な暖房法が北海道や樺太に無いのは兩雪の濕氣の多い地方だからでもあらうか。併しアイヌの堅穴と溫突との間には一脈の類似點が無いとも云へない。

とりとめもないことを何時まで書いても際限が無いからこの邊でやめる。匆卒の間の瞥見で誤解の多いことを豫期する。切に各位の御高教を待つ。(完)

西遊夢錄

(七)

瀧川規一

蘇國巡遊

(VIII)

アバザンよりバース (Perts) まで

アバザンで煙製のハドック (haddock) に飽きを覺え、旅鳥の身の常として靜心もなく、附近の名所舊蹟を以て逃がすまじと腐心する。折角アバザンまで北上した以上是非見逃がす可からざるものがある。貴國の遊獵によつて故國にまで

その名の轟くバルモラル (Baltimore) の名城がそれである。アバザンからバラタ (Ballater) まで汽車で行く。それより乗合の自動車である。バラタまでの車窓から眺めるダー (Dae) 河畔の風景は「上流に廻るに従つて變化を増し、風景として天下に誇るに足る」とアバドニーアンの自慢する程あつて、旅客の歎賞に値して餘りありと云つても過言ではない。清き河流が自然を剝削するに剛軟宜しき得、或は礫石を洗ふ潺湲の流となり、或は豁谷を斷裁して大小の瀑布を作り、或は溪